Ⅲ　高校生の読書傾向について

織　田　長　繁

はじめに

前号において，中学生の読書傾向を評価および部との関係を中心にして分析したが，内容（種別）からの検討は行わなかった。今回は49年度中に本校の図書館から高校生が借り出した図書について，前号と同じように部・評価との関係から考察すると共に，新たにどのような内容（分類別の図書）をどの程度読んだかについての結果を加えた。

本校は可能な範囲で中学と高校を一体化して運営しているので，読書の傾向についても中学高校を比較関連させれば，それぞれの特色が相互に明らかになりうると思うが，今回は高校生の問題にしぼっていきたい。

この研究には前号と同様にいくつかの弱点をもっている。その主なものは読書傾向といっても本校図書館の貸出本に限られていて，図書館内で閲覧して借り出していない図書は調査に加えていないと云う一面性が強いこと，貸出した場合にも果して閲読し終っているか否か不明であることがある。本校図書館以外の図書に関しては調査をしていないので，むしろ本校図書館の利用を知るもので生徒の読書傾向とは云えないかも知れない。しかし限定された条件であっても，それなりの意味は持っているので記すわけである。なお1年間に貸出された図書を詳細に調査したとしても，その年度の傾向とは云えても全体の傾向とは断定できない。少なくとも2年3年に及ぶ継続的研究がなくては読書傾向とは云えないと思う。この意味からすれば部分的な傾向ではある。同時に読書傾向を知ることをもって最終の目的としているわけではなく，生徒指導の一部として考えている。読書だけが生徒の考え方生き方を方向付けるものではないが，大きな影響を与えることは明白である。この点から広い立場に立つ生徒指導の1側面を狙うものと考えている。

研究の基礎は，図書館に備え付けられている「個人カード」である。個人カードは生徒個人用のもので，貸出を希望する書名を記載して提出することになっているため，書名とその貸出月日が明らかになり，正確な資料となっている。貸出は中間試験と期末試験の1週間前から試験終了までと春の休暇および特別な場合を除いて毎日行われている。1人1回3冊までを1週間にわたって貸出しているが，夏と冬の休暇には1人5冊までを認めている。返却が後れた場合すなわち延滞した場合には種々の方法を用いて連絡するが，延滞日数の2倍の日数は貸出を禁止している。これらに関する手続きは各学級から選出された2名以上の図書委員が，図書部教官3名と司書1名の指導を受け，週1回当番となって行うことになっている。

I.　全般的な立場から

49年度にあっては総貸出冊数を在籍者全員で除した時に，3.8冊となる。貸出者は在籍者の53％にしかならず，47％は1冊の貸出もなかった。貸出者の平均冊数は7.3冊（男子8.5冊，女子6.2冊）である。云いかえると2カ月に1冊の割である。在籍者の47％が1冊の貸出もなかったこと，貸出者でも1年に7冊強と云うことは考えなければならない数値ではなかろうか。生徒個人にかかわる事情（読書を好まない等），読みたい本が図書館に備え付けられていない・図書館の本の程度が難しすぎると云うような図書館側に求められる事情，高価な本を除いては自己や家庭の費用で購入し自分の本として読みたいと云ったような事情，特別な場合としてはテレビやラジオで概要は理解できるから読まないと云ったような事情その他種々の原因は考えられるけれども，読書能力も増し批判力も向上してきている高校生にとって，上に述べた数値は物足りない。貸出冊数が少ないことは読書量の少ないことに連がっているし，又読書だけが高校生にとって必要欠くべからざるものとも断言でき難いが，種々な意味から読書の必要性を語り，大いに読書をすすめるべきであろう。なお貸出者の平均である7冊強は，3年4.9冊2年8.5 1年7.0冊で，3年生が少ない。それは受験に関係していると思う。男女比では3年2年共に男子が多く，2年では1人当り4冊の差があって意外な感じがする。1年は女子の方が多いとは云え，その差は1冊にすぎないから，同量と見ておきたい。

次に貸出された時期を見ると，2つの山がある。第1の山は6月を頂点（全貸出冊の15％に当る一以下同様に記す）として7月（11％）5月（7.5％）に及ぶもので，第2は11月を頂点（14％）として10月（12.6％）9月（11.6％）12月（9.6％）にまたがるもので

ある。6月と11月を頂点とする2つの山の存在は，附属中学校の場合にも共通してみられた現象であったし，本校としその意味付けを行うことは必要であろう。9月から11月に及ぶ山は，「読書の秋」とも一般的に云われる時期であるし，夜が長く涼しくなってゆっくり出来ると云う自然条件もあろうが，中間試験がある10月は，11月初旬に行なわれる文化祭のための準備に迫われる多忙な時でもある。それにもかゝわらず10月11月2カ月間で年間の26%を占めていることは，注目すべきことである。逆に7月と12月は休暇に入る時であるにかかわらず，それぞれ10%・9%しかない理由は理解しにくい点である。一応の推測は出来るけれども，この点についても十分な検討を要する点と思う。

II. 部と評価との関係から

1. 部との関係から見た場合

ここに記す「部」とは生徒会活動の一端を狙う部のことで，カリキュラムに組込まれている全員必修のクラブ活動で云う部のことではない。本校ではこの部への加入は強制されることはなく，生徒の自由意志によるものとなっているので，部活動をしない者もいる。以下生徒を類別して体育系の部に属している者（体育系と略記　以下同じ）文化系の部に属している者，何れの部にも属していない者（無部）とし，その類別によってどの程度の読書量を示すかを取上げることにする。（なお今後は特別に記す場合の外は，貸出した者についての調査とし，貸出しなかった者については省略したことを付記する。）

この類別によると1人当り文化系9.2冊体育系7.5冊無部5.6冊の数値を得た。高校生の段階になると部活動の内容が高度となり，密度も濃くなってくる。特に文化系の部の中には，文献によって調査研究の方向を定め，更に内容を深めていくものが少なくないので，この傾向が文化系の読書が比較的に多いことに連るのであろう。小差ではあるが無部が最低であることには，考察を進める要がある。体育系と違って体力的消耗は全くないし，部活動から生じる時間的拘束もないにもかかわらず，読んでいない。先述した通り読書だけが高校生にとって必要なものとは思わぬが，部活動に参加していない者は何をしているのであろうか。無部の者全員が学習に全力を注いでいるわけではない。余暇の積極的利用を含めた生徒指導は，この場合からも緊急を要するものであろう。また無部の5冊強の数値は全学年を通じての冊数であると共に，各学年毎の冊数でもある。即ち無部のものは学年にかゝわらず，5冊の読書の線を見出すことが出来る。体育系と文化系は共に2年1年3年の順となっている。

男女の別を加えて見ると，2年文化系男子が24.5冊と最も多く，これに続いては1年文化系女子が15.5冊，2年体育系男子の12.2冊となっていて，これ以下とは差がある。少ない方では3年体育系女子の2冊強，3年体育系男子の3冊強であるけれども，これを除くと1年文化系男子の3冊強，1年無部男子の5冊弱である。その中間にあるものは省略したが，省略した資料を中心に他の資料を合わせると，文化系では各学年男女共に多読するものとそうでない者が入りまじっているのが明らで，体育系では3年を含めて男子が多読し，無部では全体を通じてほゞ同量の読者で多くないと云う，一応の傾向が出てきている。

2. 評価との関係から見た場合

この場合の「評価」は成績通知票に示されている5段階評価そのままを云うのではない。学年末に各科目毎に5段階によって示された評価を合計して得た数値を素点とし，全校の統一的な数値を以って偏差値に換算し，これを基準にして5段階に改めて評価し直したものである。この方法で評価された人数比は評価5のもの（〔5〕と略記する。以下同様な表現法をとる）5.8%　〔4〕22.7%　〔3〕35.2%　〔2〕32.0%　〔1〕4.3%である。

この5段階法の評価によって，学年を通じた場合には〔4〕10.1冊　〔2〕8.1冊　〔5〕7.3冊　〔3〕5.9冊　〔1〕4.1冊となる。その差は最大のものでも2冊であるから，〔4〕と〔2〕，〔2〕と〔5〕のような評価間の実質的な差はないと思う。しかし〔1〕は〔4〕・〔2〕の半数以下又は半数程度の読書をしているにすぎないこと，成績が振わぬ〔2〕がよく読んでいること，評価と読書量は余り関係がないらしいことは理解できる。〔2〕が比較的多く読んでいることを強いて意味付けると，学習よりも読書に興味を多く持つ者が多いと云えるかも知れない。また〔4〕が最も多いことも，学習上の力もあってその余力を以って読書しているとも考えられ，〔5〕は学習に十分の力を注いでいるためであるかもしれない。（これらは生徒から意見を徴集した結果でなく，当方の一方的な推測に過ぎないので，1面的であるとも思う。）同じ年度で中学生の場合には，評価に比例した読書量すなわち〔5〕が最も多く読み〔4〕がこれに次ぎ，最低は〔1〕に至る明瞭な傾向が認められたが，高校の場合には必ずしも評価に応じるような読書をしていない傾向を認めることができよう。

この傾向を学年別に見ると，多い方から示すと2年では〔4〕〔2〕〔5〕〔3〕〔1〕1年では〔5〕〔4〕〔2〕〔3〕〔1〕3年では〔5〕〔3〕〔2〕〔4〕〔1〕となる。1年の場合にはほぼ評価通りの読書量であるが，〔5〕と〔4〕の差は平均1冊強，〔2〕と〔3〕の差が3冊であるので，中学生に見られる読書傾向の中に高

校生的な傾向が表われていると云ってよく，2年になると評価とは関係のない読書の傾向が現われていると云える。

3. 部と評価との関係から見た場合

評価別と前述した部別の2つの立場に学年別を加えた一覧表の中から，はっきりした傾向を読み取ろうとしたが極めて複雑で，しかもそれぞれの欄に該当する人数が0名1名のような場合もあり，相互の関連を見出すことは困難な状態にあった。強いてまとめてみると

1) 2年1年の文化系は同量の読書をしているが，評価による差が著るしい。最も多いのは共に〔4〕のもので，しかも20冊をこえているから，この中には多読する者がいる。
2) これに次ぐものは2年の体育系で，評価別に差はあるけれども文化系のような偏りはなく，平均して読んでいる。その中では〔4〕が多い。
3) 〔2〕は〔4〕に次いで読むが，その中で3年体育系と2年文化系を除くと，他はほぼ平均した読書をしている。無部の中では1年が最も多い。
4) 〔3〕は3年の体育系及び無部を除くと2年体育系と1年無部が比較的多い傾向となっている。
5) 〔1〕は3年が0～1冊で極めて少ないが，1年2年の文化系と1年の無部は比較的多い。
6) 〔5〕については該当者が少ないために比較は困難であるが，1年の体育系は多い。成績もよく読書にも親しんでいるのは学習・スポーツ・余暇の3者のかみ合わせがうまくいっているからであろうし，時間を効果的に利用しているとも云えるであろう。

Ⅲ. 内容（分類）上から

1. 全体から見た場合

今まで述べたものは部・評価・学年の立場から見た傾向であるが，図書の内容（分類又は種別）上においては少しも触れていないので，この点について探って見ることにする。本校における図書分類法は「日本十進分類法」（NDC）によっている。念のため日本十進分類法による種別は，000 総記　100 哲学　200 歴史　300 社会科学　400 自然科学　500 工学・技術　600 産業・交通　700 芸術・諸芸　800 語学　900 文学である。

貸出総冊数の内最も多いのは文学で566冊，総数に対して36%を占める。以下その率を以って多い順に記すと自然科学16.1　歴史15.0　哲学11.2　社会科学6.0　総記5.7　芸術5.3　工学2.2　語学1.1　産業0.0となる。次に貸出者の内，文学を貸出した者は全数の26.0%　以下同様に歴史15.2　哲学14.1　自然科学13.1　社会科学8.7　総記7.9　芸術7.5　工学4.6　語学2.1である。貸出冊数と貸出者のそれぞれの率の順は大体一致するが，哲学・歴史・自然科学は一致しない。哲学と歴史は冊数の順で4位3位であったものが，人数比の場合には3位2位となる。自然科学では冊数で2位のものが人数では4位，すなわち多く貸出されるが読むものは左程多くないことを意味している。このことは各分類別冊数を貸出者で除した1人当り平均冊数によって明白となる。試みにこの数値を多い順に記すと，文学4.2冊　自然科学3.7　歴史3.0　哲学2.4　芸術2.4　総記2.2　社会科学2.1　産業1.9　工学1.5　語学1.5となる。芸術に関しては貸出冊数と人数は少ないが1人当りの冊数は哲学と同じで，特定の者が比較的多く読むことを示している。芸術と同傾向のもの又は逆傾向のものも認められるが，これに関しては省略し，これらをまとめると，

1) 文学は最も多くの生徒に親しまれて読まれている。
2) これに次ぐのは歴史で，自然科学は比較的少数者には親しまれている。
3) 親しみの薄いものは，工学・語学・産業関係のものである。

2. 評価の立場から見た場合

以上は全体の冊数と人員からみたものであったので，次には学年を通じて5段階の評価に関連させて考察して見る。

〔5〕から〔2〕にわたる評価の者は，それぞれ貸出冊数の38～35%の率をもって文学が第1位となっているが，〔1〕では20%となって低率となる。その代りに1位になるのは哲学である。前述したが〔1〕に属する生徒の実数が少なく，貸出冊数も全部で20冊と少ない（〔1〕以外の評価の者は最少限85冊以上である）ので，そのままの数値を信じてよいか否か疑問がある。文学の中で目に付くのは女子に非常な人気のあることである。これは本校に限定された現象ではないけれども，〔4〕と〔2〕では貸出冊数の内それぞれ半数を占め，〔3〕の場合には88%に及んでいる。男子の場合には女子程の片寄りはなく，〔5〕から〔1〕の全部にわたって20～30%の比率を示し，平均している。文学については男女を問わず要望が多いと云って過言ではない。

文学を除くと〔5〕〔4〕では自然科学が最も多く，〔5〕では28%（男子は女子の5倍半に及ぶ），これに続いて歴史がその約半数，次に哲学となる。〔4〕では自然科学は1位にはなるが〔5〕の約半数，これに続いては，哲学，総記，歴史がそれぞれ約10%の率を示している。〔3〕では歴史が18%で1位，次いで自然科学

(14.6%) 総記(12.0%)の順となる。〔2〕になると歴史(18.5%) 自然科学(10.9%) 芸術(9.2%) 哲学(8.8%),〔1〕の場合には先述した通り少数であるために比較できにくいが哲学(30%) 文学(20%) 工学(15%)の順になっている。

以上多く利用されるものについて触れたが,逆に少ない方,利用されていないものは,〔5〕では芸術 〔4〕では工業・産業・語学 〔3〕では産業・語学 〔2〕にあっても産業と語学 〔1〕では語学である。この外〔5〕における工学・産業・語学,〔1〕における総記・社会科学・産業は全く利用されていない。これら利用の多寡特に率の高いものについては,個人的な興味関心が大きな背景をなしていることに疑いはない。個人的な事情の外に学習にかゝわる背景がある。宿題,課題等にグループ研究が行われる場合には利用が大きく進むことは明らかである。

分類別利用の点から,各分類別には触れなかった男女差を含めてまとめると,凡そ次のようになる。

1) 文学は評価段階にかかわらず最も多くの生徒に親しまれ,全貸出冊数の1/3以上を占め,女子がより好んでいる。
2) 自然科学は評価に比例した利用の傾向にあるが,評価を問わず少なくとも男子は2倍以上の利用をしている。
3) 評価に関係が少なく,しかも各評価段階に多くの生徒に好まれているのは歴史であるが,男子の方がより多く読んでいる。これに次ぐものは哲学であるが〔5〕・〔2〕では女子が多く,〔4〕・〔3〕では男子が2倍程度利用している。
4) 利用が最も少ないのは語学であるが,〔1〕は意外に読んでいる。これに続くものは産業と工学で,工学がやゝ多く利用されている。女子は語学の分野で男子を上廻っているが,その他は各評価分類を通じて男子の方が多い。
5) 各評価を通じて見ると自然科学・歴史・哲学が多いけれども,〔2〕においては芸術関係のものが男子に読まれている。

IV. まとめ

以上評価,部,種別に学年,男女別をからませて本校に見られる読書の傾向を,数字の上から探って見た。統計の結果表われてきた数値には,その差が示すような明瞭な意味を持っているものもあり,差はあっても意味の極めて少ないと思うものもあった。何等かの意味を持つであろうと考えたものは記したつもりである。この結果一応得られた傾向は本校の特色として捕えるだけでなく,これらを基礎の1つに加えて,広い意味でほ生徒指導の資料に利用できれば幸甚である。この傾向は49年度1年間の傾向に過ぎぬとも思う。学習のあり方,行事特に研究旅行や部活動の姿勢等によって,統計上の数値は相当に流動すると予測される。従って必要事項については継続的な調査を続け,その上に基いて読書傾向を把握していくことが必要ではないかと考えている。